—「農業農村開発の技術を考える」を読んで—

農業農村開発の技術を考える時、言葉の定義には慎重になる必要がある。農業農村という言葉は存在しない。筆者は本稿で農業農村開発は農業開発と農村開発を総称したものとみなす。技術と似た言葉に工学がある。技術は手段そのものであるのに対し、工学は研究する学問分野を指す。そこで、農業農村開発の技術は農業および農村を開発するための手段であると定義づけることが可能であろう。農業を営む人や農村で暮らす人の生活に役立つような手段とは何であるか。それを知るためには、農村の人々の本音や文化を把握しなければならない。本稿は、筆者自身の体験を通じて会得した農業農村の人々の本音を把握するためのヒントと農業農村社会に技術を導入・普及するための心構えを述べる。

自身が農家の二男だった筆者は、幼少期農作業の節目に行われる祭りなどの行事に胸を躍らせていた。しかし、小学校に入学すると田植え機などの農業機械が導入され、農作業に変革が訪れた。楽しみにしていた行事が消え、農協は農家を「何でも屋」から専業へと変えた。筆者の幼少期には現在見直されつつある農業の多面的な機能がすでに備わっていたように思われる。

筆者は農学部に進学するものの、授業の教材としての農業と現実の農業とでは大きな隔たりがあることを疑問視していた。その後修士課程、博士課程へと進学し、三重大大学の助手として働くうちに農業土木工学と出会う。海外調査デビューを果たし、東アジア各国で筆者が感じたのは、農業機械化以前の日本の農村の雰囲気だ。同時に、ここに最新技術を導入することに対する畏れを感じた。農業機械が普及した日本では農業の後継者が不足し、耕作放棄地が増えている。発展途上国における農業技術の導入を考える時、日本における農業の歴史をふまえたうえで技術の導入や普及を図らなければ、現在日本の農業が抱える問題を技術と共に輸出しかねない。

農業技術の普及によって農作業の負担は大幅に軽減し、暮らしにゆとりが持てるようになったことは事実だ。しかし、急速な技術の導入は環境破壊などの混乱を招く可能性があることもまた忘れてはならない。対象地域の現状を適切に分析し、どの技術をどの順番に、そして誰に普及させるかを吟味する必要がある。導入した技術が現地に根付くかどうかは最終的にはそこで暮らす人々に依存する。良い技術は自然淘汰されたのち残っていくようである。

農業農村開発の技術者は、対象とする「農業農村社会の本音」と「適用可能な技術」との両方に精通していることが望ましい。細分化されてしまった農学全分野の最低限の技術に通じていなければならない。